

## この食に対するこだわりが 子規の文学活動の支えに

九月十九日は、明治の俳句、短歌の革新者、正岡子規の命日である。その忌日は、彼の「糸瓜咲て痰のつまりし仏かな」などの遺句から糸瓜忌、また瀬祭書屋主人から瀬祭忌ともいう。

彼は二十歳代のはじめに咯血を見、号を、血を吐くように鳴くホトトギスに見立て、子規と名付けたのである。

その後、日清戦争の従軍記者として帰国途中再咯血し、さらに脊椎カリエスに進み、ほとんど病床に伏す状態となり、明治三十五年に三十五歳で亡くなるまで身動きもままならないなかで、文学活動を続けた。

彼は言う。「僅かに残る一つの楽と一つの自由、即ち飲食の楽と執筆の自由と」。また「小生唯一の療養法はへうまい物を喰ふ」に有之候」とも書いている。

この言葉の通り、病床に伏すからには食事に徹底的にこだわった。それは、明治三十四年から書かれた『墨汁一滴』『病牀六尺』『仰臥漫録』にみることができる。ことに『仰臥漫録』は、



食べものの記録として古今東西をみても破天荒なものといえる。痛みに呻き、泣き喚いでいる身で、丹念に食の記録を残している迫力は鬼気迫るものさえある。そして、その食の量の

多さにまた驚かされるのである。鰻の蒲焼七串だとか焼鰯十八尾という記録を読むと、この人はもう怪物としかいいようがない気がしてくる。

肺病の最高の栄養食と考えられていたせいか、鰻や泥鰌の文字が繰り返して出てくる。そのわりには肉類が少ないのである。牛肉のタタキの生肉を食べたという記録（明治三十四年五月十日）もあるが、歯の調子が悪かったらしく、「うまからず」と記している。

それでも『仰臥漫録』の最後（明治三十五年三月十二日）に、高浜虚子が来てハムをくれたという記録を見ると、なぜかほっとするのである。